

群 教 セ	G09 - 04
	平23.243集

# 音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとする 外国語活動の工夫

— 段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりを通して —

長期研修員 大澤 貴子

## 《研究の概要》

本研究は、外国語活動において、多くの英語の音声に触れ、徐々に音声に慣れ親しみながら、意欲的に表現しようとすることを目指したものである。そこで、自然に発話できるように、音声項目の配列である「発話アプローチ」を〈インプット段階〉〈インテイク段階〉〈アウトプット段階〉と三つの段階に構成した。そして、この三つの段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりを行い、実践した。

**キーワード** 【外国語活動 慣れ親しみ 段階ごと 発話アプローチ 繰り返す】

## I 主題設定の理由

今日では、次世代を担う子どもたちにとって、いろいろな国の人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けることが、ますます重要となってきたと考えられる。このような背景を踏まえ、今年度より小学校第5学年及び第6学年に「外国語活動」が位置付けられた。小学校学習指導要領解説外国語活動編では、『外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。』ことを目標としている。これは、小学校段階では英語を通じて、コミュニケーションを体験しながら、自己を表現し、人とつながっていかうとする態度を身に付けることにある。

また、平成23年度群馬県学校教育の指針では「コミュニケーションへの積極的な態度の育成に向けて、児童の発達段階や興味・関心を重視して、コミュニケーションを図る楽しさが味わえる活動を設定すること」を指導の重点として挙げている。

協力校の児童の様子を見ると、多くの児童が外国の言葉や文化に触れ、ALTと交流できる外国語活動を楽しみにしている。その反面、英語の意味を覚えたり、覚えたことを相手に伝えたりすることには抵抗感をもっている。また、自分を表現するときに恥ずかしがったり、新しいことに挑戦することに戸惑ったりする姿が見られ、自ら進んで行動できず、英語を使って活動したり、英語で発話したりすることを受け身的な姿勢で行っているようにも見られた。

これらの実態から、楽しさを感じながら、自信をもって自ら表現できるようにすることは、コミュニケーション能力を高める上で必要であると考えられる。そのためには、機械的に英語を繰り返すような練習ではなく、活動で用いる英語に、楽しみながら徐々に触れることが大切であると思われる。そして、活動を通して自然と発話する体験を繰り返し、目的や状況に応じて英語を自分で選ぶことで、「分からない英語」が「聞いたことのある英語」になり、「聞いたことのある英語」が「分かる英語」へ、そして、「使ってみたい英語」へと慣れ親しんでいき、それが自信へとつながっていくものと考えられる。

そこで、本研究では、聞いた音声から自然に英語の発話を促す、段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりを考え、段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりをすることで、児童は自然と英語の音声に慣れ、「使ってみたい英語」を自分で選んで使うようになり、音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとすると考え、本主題を設定した。

## II 研究のねらい

外国語活動において、音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとするために、段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりの有効性を明らかにする。

## III 研究の見通し

- 1 「出会う」過程で、理解しやすい多くの音声に触れ、自分の中に音声を入れることをねらいとする〈インプット段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、楽しみながら聞く活動を繰り返し行えば、英語や日本語の音の違い、言葉の意味に気づき、英語の音声と意味をつなごうとするであろう。
- 2 「慣れる」過程で、聞いた音声の意味を理解し、自分の言葉にしていくことをねらいとする〈インテイク段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、音声の意味を推測し、自分なりに理解した英語を使う活動を繰り返し行えば、音声と意味のつながりを深めるようになるであろう。
- 3 「広げる」過程で、英語を自分の言葉として発話することをねらいとする〈アウトプット段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、目的や状況に応じて使う活動を繰り返し行えば、音声と意味のつながりを深めた英語を自分で選んで使っていくようになり、音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとするであろう。

## IV 研究の内容

### 1 音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとする児童について

外国語活動では、積極的に相手とかかわろうとする子どもを育てていくことを目指している。そのためには、相手意識をもって、進んで自己表現しようとする態度を身に付けることが重要であると考ええる。

本研究でとらえる音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとする児童とは、段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりを通して、活動に用いる英語に繰り返し触れていく中で、音声と意味のつながりを深め、「分からない英語」が「分かる英語」へ、そして、「使ってみた英語」に変わることによって、「分かる英語」を自分で選び、自信をもって使おうとする児童であると考ええる。

### 2 段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりについて

#### (1) 「発話アプローチ」について

「発話アプローチ」とは、早急な発話を求めず、多くの音声に触れさせたり、徐々に音声に慣れ親しませたりしながら、児童が自然に発話していけるように構成された音声項目の配列である。また、この「発話アプローチ」は、理解しやすい多くの音声を聞いて、自分の中に音声を入れる段階〈インプット段階〉の後に、聞いた音声の意味を理解し、自分の言葉としていく段階〈インテイク段階〉を経て、自分の言葉として発話する段階〈アウトプット段階〉という言語習得プロセスを考えて組み立てるようにした。

そして、「出会う」「慣れる」「広げる」の三つの過程に、この「発話アプローチ」の〈インプット段階〉〈インテイク段階〉〈アウトプット段階〉をそれぞれ計画的に位置付けている。

#### (2) 段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりについて

段階ごとの「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返す授業づくりとは、三つの過程におい

て、それぞれの段階における「発話アプローチ」の音声項目の配列から、学年や児童の実態に応じて必要な音声項目を選択して計画的に活動に取り入れることで、児童が、徐々に音声に慣れ親しんでいくことができる授業づくりのことである。この中で、それぞれの段階の「発話アプローチ」のねらいに沿った活動を繰り返すことで、音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとするにつながるものと考ええる。

「出会う」過程は、理解しやすい多くの音声に触れ、自分の中に音声を入れる〈インプット段階〉の音声項目を選んで取り入れ、「聞くこと」を中心に構成する。そして、その音声項目を取り入れた歌やチャンツなどの活動を通して、児童は、楽しみながら英語の音声を繰り返し聞くことで、英語や日本語の音声のリズムやアクセントの違い、言葉の意味に気付き、音声と意味をつなげていくようになるものと考ええる。

「慣れる」過程は、聞いた音声の意味を理解し、自分の言葉にしていく〈インテイク段階〉の音声項目を選んで取り入れ、英語を「聞いたり、話したりすること」を意図的に繰り返すように構成する。そして、その音声項目を取り入れたゲームなどの活動を通して、児童は、英語の意味を推測し、理解した英語を繰り返し使うことで、楽しみながら英語の音声に慣れ、音声と意味のつながりが深まるようになるものと考ええる。

「広げる」過程は、英語を自分の言葉として発話する〈アウトプット段階〉の音声項目を選んで取り入れ、英語を「話すこと」を中心に構成する。そして、その音声項目を取り入れコミュニケーションを図りながら「発話」を体験する活動を行う。こうして児童は、目的や状況に応じて英語を繰り返し使うことで、音声と意味のつながりを深めた英語の中から自分で選んで、自分の言葉として発話するようになり、自信をもって使っていこうようになるものと考ええる。

以上のことから、段階ごとの「発話アプローチ」の音声項目を選んで活動に取り入れ、ねらいに沿った活動を繰り返し、自然な発話を促すことで、児童は自信をもち、活動で用いた英語を使ってみたいと思えるようになり、意欲的に表現しようとするものと考ええる。

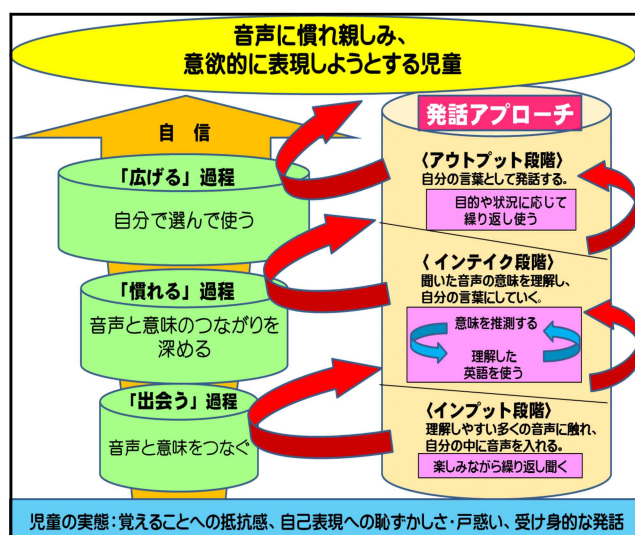


図1 研究構想図

## V 研究の計画と方法

### 1 実践計画

対 象	研究協力校 小学校第6学年 28名
期 間	平成23年9月14日 ～ 10月26日 5時間
単 元 名	「絵本を作ってクイズを出そう」 (関連：英語ノート2 lesson 8)

### 2 抽出児童

A	「英語を覚えて話すことは難しい」と感じており、活動に対しても消極的である。遊びやゲームを繰り返す中で、活動で使う音声に慣れ親しみ、楽しみながら英語を使うことで、英語で意欲的に表現していけるようにしたい。
B	外国語活動は好きだが、「英語で表現することは苦手」「表現することは恥ずかしい」という思いが強い。英語の音声に多く触れ、英語に慣れる活動を繰り返し行う中で、自信をもち、英語で意欲的に表現していけるようにしたい。

### 3 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	理解しやすい多くの音声に触れ、自分の中に音声を入れることをねらいとする〈インプット段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、楽しみながら聞く活動を繰り返し行うことは、英語や日本語の音の違い、言葉の意味に気づき、英語の音声と意味をつなごうとする上で有効であったか。	活動の観察 授業記録ビデオ 振り返りカード 事前・事後アンケート
見通し2	聞いた音声の意味を理解し、自分の言葉にしていこうとすることをねらいとする〈インテイク段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、音声の意味を推測し、自分なりに理解した英語を使う活動を繰り返し行うことは、音声と意味のつながりを深める上で有効であったか。	活動の観察 授業記録ビデオ 振り返りカード 事前・事後アンケート
見通し3	英語を自分の言葉として発話することをねらいとする〈アウトプット段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、目的や状況に応じて使う活動を繰り返し行うことは、音声と意味のつながりを深めた英語を自分で選んで使っていくようになり、音声に慣れ親しみ、意欲的に表現しようとする上で有効であったか。	活動の観察 授業記録ビデオ 振り返りカード 事前・事後アンケート

### 4 単元の目標及び評価規準

目標	慣れた英語を使って絵本を作り、2年生にクイズで紹介する。		
言語材料	What do you see? I see a ～. 動物、野菜、果物、色、形容詞などの単語		
評価の観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語活動への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
評価規準	グループで協力して意欲的にクイズや絵本を作ろうとしている。	クイズを出すための表現を使い相手に言ったり、質問したりしている。	世界の国の物語を知り、その面白さに気付いている。

### 5 指導計画(全5時間)

- は、「発話アプローチ」を取り入れた具体的な活動 ( )は具体的な「発話アプローチ」の音声項目
- は、「発話アプローチ」のねらい

過程	時	学 習 活 動	研 究 上 の 手 だ て
出 会 っ ち	1	<p><b>ねらい</b></p> <p>〈インプット段階〉理解しやすい多くの音声に触れ、自分の中に音声を入れる</p> <p>内容を想像しながら英語を聞くと共に、世界の様々な物語に触れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●英語ノートの物語を聞く活動</li> <li>○音声の特徴に気付く。</li> <li>●ALT の国の絵本の読み聞かせを聞く活動</li> <li>○聞いた音声のイメージをもつ。</li> <li>●絵本の読み聞かせを聞く活動</li> <li>○音声の特徴に気付く。</li> </ul>	<p><b>(日本語との音声の違いに気付く)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語に興味をもてるように、英語ノートのほかに絵本も用意し、提示する。</li> </ul> <p><b>(具体物を手がかりにしてイメージをもって聞く)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語の音声に興味をもたせるために、絵本を見せながら、ALTのお気に入りの物語を紹介する。</li> </ul> <p><b>(リズムやアクセントに注意する)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムの面白さに気付けるように絵本を読み、繰り返しの表現に興味をもてるようにする。</li> </ul>
	2	<p>ゲームを通して、絵本作りやクイズに使える形容詞を使った英語に慣れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●絵本を聞いたり、チャンツをしたりする活動</li> <li>○音声中に興味をもつ。</li> <li>○音声の特徴に気付く。</li> <li>○音声の意味を推測する。</li> <li>●教師の絵本 I の読み聞かせを聞く活動</li> <li>○聞いた音声のイメージをもつ。</li> <li>○音声と意味をつなぎ合わせる。</li> <li>●「ミッシングゲーム」をする活動</li> <li>○聞いた音声のイメージをもつ。</li> <li>○音声の意味を推測する。</li> <li>○音声と意味をつなぎ合わせる。</li> </ul>	<p><b>(音楽に合わせて体を動かし、歌う)</b></p> <p><b>(リズムやアクセントに注意する)</b></p> <p><b>(意味を推測してまねて言う)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・興味をもって聞くことができるように、繰り返しの表現をまねしたり、出てきた動物のカードを黒板に貼ったりする。</li> </ul> <p><b>(音声とイメージを対比しながら聞く)</b></p> <p><b>(聞かれたことに反応して1、2語で答える)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・形容詞のイメージを推測させるために、ジェスチャーなどを付けながら読み聞かせをする。</li> </ul> <p><b>(具体物を手がかりにしてイメージをもって聞く)</b></p> <p><b>(意味を推測してまねて言う)</b></p> <p><b>(聞かれたことに反応して1、2語で答える)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・意味の推測を図るために、ジェスチャーをする</li> </ul>

慣 れ る	<p>ねらい 〈インテイク段階〉聞いた音声の意味を理解し、自分の言葉にしていく</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●「Go fish ゲーム」をする活動</li> <li>○意味の推測を繰り返し、理解する。</li> </ul>	<p>と共に、形容詞と動物の両方でイメージが膨らむようなカードを提示する。</p> <p><b>(具体物を手がかりにして意味を理解して簡単な英語で答える)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カードを引き合うゲームの中で、繰り返し聞いたり、言ったりする機会を増やす。</li> </ul>
	<p>ゲームを通して、絵本作りやクイズに使える英語表現に慣れ、使おうとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●チャンツをする活動</li> <li>○知っている英語に興味をもつ。</li> <li>●「キーワードゲーム」をする活動</li> <li>○意味の推測を繰り返し、理解を深める。</li> </ul> <p>●「伝言ゲーム」をする活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○理解した英語を使いながら自分の言葉にしようとする。</li> </ul> <p>●作ったカードでクイズを出す活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○理解した英語を使いながら自分の言葉にしようとする。</li> </ul>	<p><b>(音声聞いて、具体物を手がかりにイメージをはっきりもつ)</b> <b>(聞いた英語を理解し、反応して動く)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いた英語の理解が深まるように、絵カードを黒板に掲示して、「キーワードゲーム」を行う。</li> </ul> <p><b>(聞いた英語を理解し、まねして人に伝える)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚的にも分かりやすく伝えるために、ゲームの仕方についてデモンストレーションをする。</li> </ul> <p><b>(必要なものを得るために、理解した英語を使う)</b> <b>(理解した単語や簡単な文を聞いて、考え伝える)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分かる英語に慣れるために、表現を繰り返し使いながらカードづくりをする場を設定する。</li> </ul>
広 げ る	<p>ねらい 〈アウトプット段階〉英語を自分の言葉として発話する</p> <p>グループで協力して、絵本やクイズで使う英語を選び、使おうとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●チャンツをする活動</li> <li>●教師の絵本Ⅱの読み聞かせを聞く活動</li> <li>●クイズに答える活動</li> <li>○理解した英語に興味をもつ。</li> <li>●絵本づくりを考える活動(グループ活動)</li> <li>○場面や相手に応じ、自分の分かる英語を選んで表現する。</li> </ul> <p>●グループの中でクイズを出し合う活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○場面や相手に応じ、自分の分かる英語を選んで表現する。</li> </ul>	<p><b>(英語のリズムやイントネーションをまねして言う)</b> <b>(聞いて分かったことを言う)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いたことのある英語の意味が思い出せるように色もヒントと一緒に伝える。</li> </ul> <p><b>(分かる単語や簡単な文を聞いて、考え伝える)</b> <b>(分かっている英語を組み合わせで伝える)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2年生のために、分かりやすい英語を加えたり、ジェスチャーも取り入れる。</li> </ul> <p><b>(場面や相手に応じ、自分の言いたいことを考え、言葉を選んで伝える)</b> <b>(分かっている英語を組み合わせで伝える)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が分かる英語を使ってクイズが出せるように、お互いにアドバイスをし合ったり、協力し合ったりできるグループ活動を取り入れる。</li> </ul>
	<p>グループで協力し、自分たちが作った絵本を使って、2年生に英語でクイズを出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●10 steps を歌う活動</li> <li>○理解した英語に興味をもつ。</li> </ul> <p>●自分が作成した絵本を使って2年生にクイズを出す活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○場面や相手に応じ、自分の分かる英語を選んで表現する。</li> </ul>	<p><b>(英語のリズムやイントネーションをまねして言う)</b></p> <p><b>(場面や相手に応じ、自分の言いたいことを考え、言葉を選んで伝える)</b> <b>(場面や相手に応じ、自分の知っていることを人に伝え、話を聞いて自分の分かる英語で応じる)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのグループも意欲的に表現できるように、ねらいに沿って表現しているグループを賞賛する場を取り入れる。</li> </ul>

## VI 研究の結果と考察

### 1 理解しやすい多くの音声に触れ、自分の中に音声を入れることをねらいとする〈インプット段階〉の「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返し行うことの有効性について

#### (1) 結果

第1時は、「音声の特徴に気付くこと」をねらいとした「発話アプローチ」の音声項目を取り入

れ、絵を見ながら、英語ノートの物語を聞く活動に取り組んだ。児童は、絵を手がかりにCDから聞こえてくる音声の強弱に興味をもち、物語を推測して意欲的に絵の番号を記入していた(図2)。次に、「聞いた音声のイメージをもつこと」をねらいとした音声項目を取り入れ、「絵本の読み聞かせ」を聞くという活動を行った。挿絵やALTのジェスチャーを手がかりに、児童は物語の意味を推測し、ALTの質問に日本語も交えて答えていた。続いて、「リズムやアクセントに注意する」を取り入れ、再度「絵本の読み聞かせ」を聞くという活動を行った。ここでは、リズムやアクセントに注意しながら英語を読み、出てくる動物や色などについて児童に質問をしながら読み聞かせた。その結果、振り返りカードには、「繰り返しの表現がおもしろかった」と答える児童が多く見られ、ほとんどの児童が繰り返し出てくる英語に気付き、興味をもって聞いていた。



図2 物語を推測する児童

第2時では、「音声に興味をもち、音声の意味を推測すること」をねらいとした音声項目を取り入れ、絵本に出てくる表現を使ったチャンツをしたり、リズムに合わせてまねして口ずさんだりする活動をした。抽出児童Aは、繰り返し出てくる英語を聞き、リズムに合わせて手を打ったり体を動かしたりするなど、英語のリズムを自然に楽しむ様子が見られた。次に、「聞いた音声のイメージをもち、音声と意味をつなぎ合わせること」をねらいとした音声項目を取り入れた「絵本の読み聞かせ」を聞くという活動をした(図3)。児童は、「What do you see?」と聞かれると、「Hint, please.」とヒントを求め、教師のジェスチャーを交えたヒントを聞いて動物を当てるというやりとりをしながら読み聞かせを聞いた。次に、「音声の意味を推測したり、音声と意味をつなぎ合わせること」をねらいとした音声項目を取り入れた「ミッシングゲーム」の活動を行った。抽出児童Bは、動物の絵カードと教師の形容詞を表すジェスチャーを見ながら、英語を集中して聞く様子が見られた。その後、ジェスチャーをしながらリズムに合わせて、ALTの話す英語のまねをしてどの絵カードが隠されたのかを推測して言っていた(図4)。抽出児童Aは、振り返りカードに、1回目の実践後には、聞き取ることの難しさを記述していたが、2回目の実践後は、リズムを用いて聞くことで、徐々に意味がつかってきたことを記述していた(図5)。抽出児童Bは、1回目の実践後のアンケートでは、英語を聞くことに対してまだ苦手意識をもっていたことを記述していたが、2回目の実践後には、絵やジェスチャーなどを手がかりにして、音声を聞いて意味を想像することができたことを記述していた(図6)。



図3 読み書かせを聞く児童



図4 ジェスチャーをする児童

(1回目の実践後の感想)

発音が日本とちがって  
おもしろい。  
聞いてわかるときとわからな  
いときが時々ありました。

(2回目の実践後の感想)

次もその次も 同じ言葉で  
リズムにあわせて聞いているうちに  
だんだん 内容がわかってきました。

図5 抽出児童Aの変容

(1回目の実践後の感想)

英語は楽しいけど、何を  
言っているかわからない  
ときがあった。

(2回目の実践後の感想)

絵カードを使って、ジェスチャーで表現してくれたから  
わかった。

図6 抽出児童Bの変容

## (2) 考察

〈インプット段階〉を終えた2時間目の振り返りカードでは、「聞いた英語の意味がイメージできましたか」と聞いたところ、「まあまあできた」も含めて96%の児童が音声の意味のイメージ化を図れたと答えた(図7)。そして、その理由については、「リズムを手がかりにした」と答えた児童は86%と高く、そのほかに、「絵やジェスチャーを手がかりにした」と答えた児童は、それぞれ70%を超えた。そのことから児童は、リズムに合わせて繰り返し聞いたことや絵やジェスチャーなどの具体物を交えて聞いたことを英語の意味がイメージできた理由に挙げていることが分かった(図8)。

しかし、リズムに合わせ、具体物を手がかりに聞く活動を繰り返す中で、単調な繰り返しでは、児童の集中力が持続できない場面があった。そのような場面で、指導者と児童、児童同士のかかわり合いも加えた聞く活動に変えてみると、さらに児童は楽しみながら、リズムに合わせ、具体物を手がかりに、聞こうとしていたことが児童の様子から分かった。このように、児童は、〈インプット段階〉の音声項目を取り入れた活動の中で、楽しみながら聞くことを繰り返すうちに、徐々に音声の意味を想像し、音声やリズムに馴染むことができたと思われる。そして、絵やジェスチャーという具体物を交えて聞くことを繰り返す中で、英語の音声と意味をつなぐことができたものとする。

以上のことから、〈インプット段階〉の発話アプローチを取り入れて、楽しみながら聞く活動を繰り返し行うことは、児童が、英語と日本語の音の違い、言葉の意味に気付き、英語の音声と意味をつなごうとする上で有効であったと考える。

## 2 聞いた音声の意味を理解し、自分の言葉にしていくことをねらいとする〈インテイク段階〉の「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返し行うことの有効性について

### (1) 結果

第2時の終わりには、意味の推測を繰り返し、理解を深めることをねらいとした「発話アプローチ」の音声項目を取り入れ、「Go Fishゲーム」の活動を行った。児童は、「What do you see?」「I see a〜。」というやりとりをしながら、同じ動物絵カードを、2枚ずつ揃えていった(図9)。初めは、戸惑っていた抽出児童Aも、ゲームのルールをすぐに理解すると、声も大きくなり、意欲的に取り組む様子が見られ、授業後の振り返りカードには、活動の中で、自分なりに理解した英語を使うことができるようになったことへの満足感を記述していた(資料1)。また、ほかの児童の振り返りカードにも、「ゲームをしながらいろいろな動物の名前を覚えられた」「ゲームをすると新しい英語が楽しく覚えられる」など、ゲームの中で英語を使っている記述が多く見られた。

第3時は、再度、同じねらいの音声項目を取り入れ、「キーワードゲーム」の活動を行った。児童は、第2時での英語を思い出ししながら、絵カードをヒントにして、ALTの後についてまねて言い、キーワードを聞き取ろうと集中していた。次に、「理解した英語を使いながら自分の言葉にし

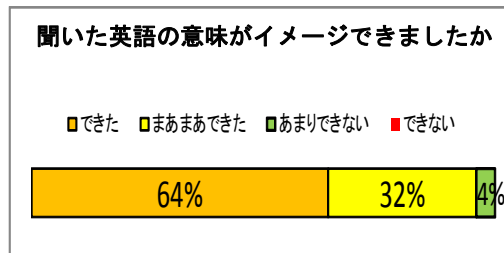


図7 振り返りカードの結果

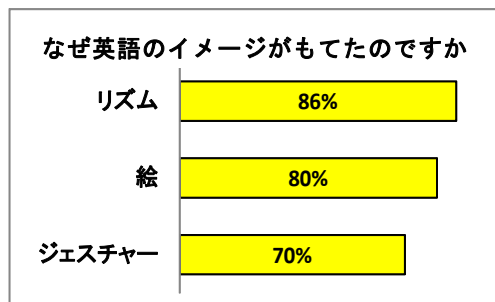


図8 〈インプット段階〉後のアンケート



図9 『Go Fishゲーム』の様子

#### 資料1 抽出児童Aの振り返りカード

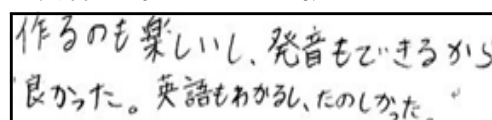
英語を使って、楽しくゲームができました。  
英語を使って話すことができてよかったです。

ようとするこゝろ」をねらいとした音声項目を取り入れ、「伝言ゲーム」の活動を行った。ここでは、5人ずつのグループに分かれ、伝言していく中で、あまり会話をする機会をもたない児童同士も、自分の番になると、聞いた英語を一生懸命伝えようとする姿が見られた。また、英語を聞き取れなかったり、忘れてしまったりした児童は、「One more, please.」と進んで聞き返して伝える姿も見られた。振り返りカードでは、多くの児童が、「英語を友達に伝えられてよかった」と記述していた。しかし、競争性のあるゲームであったため、スピードを重視してしまい、丁寧さを欠いてしまう児童の様子も見られた。



図10 クイズを出す児童

資料2 抽出児童Bの振り返りカード



続いて、「理解した英語を使いながら自分の言葉にし

ようとするこゝろ」をねらいとした音声項目を取り入れ、「作ったカードでクイズを出す」という活動を行った（図10）。抽出児童Bは、自分にとって慣れた英語を使ってクイズ用カードを作成し、それを見せながらALTにクイズを出したり、ミニティーチャーとなって指導者の代わりに友達のクイズに答えたりするなど、積極的に英語を使っている様子が見られた。そして、振り返りカードには、理解した英語を使ってカードを作成したり、クイズを出したりする活動の中で、楽しみながら英語に慣れていったことを記述していた（資料2）。終了の合図後も、「カードを作ってもっと英語でクイズを出したい」と言うなど、積極的に取り組もうとする姿も見られた。

(2) 考察

〈インテイク段階〉後にアンケートをとったところ、88%の児童が、「いろいろな表現を知ることができたのでよかった」と答え、96%の児童が「何を言っているのか分かるようになったのでよかった」と答えた（図11）。このように、これらの活動の中で、楽しみながら繰り返し英語を使うことにより、自分なりに英語の意味を理解し、さらに理解した英語を繰り返し使うことで、楽しさや満足感を得て、自分の言葉にすることができたと考える。

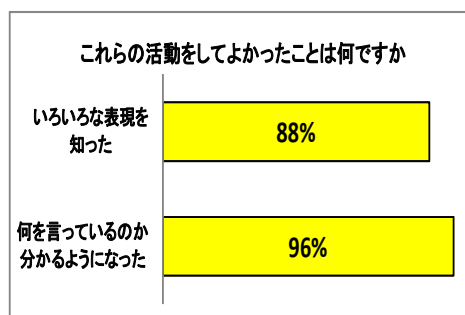


図11 〈インテイク段階〉後のアンケート

しかし、「聞いた英語を理解し、まねて言う」という

音声項目を活動に取り入れるときに、活動によっては、発話を急がせてしまうことになるため、「伝言ゲーム」のような競争性のある活動よりは、むしろ、音声項目をしっかり把握して、それをより重視できる活動に取り入れた方が、理解しやすい英語をさらに自分の言葉にしやすいことが分かった。

以上のことから、〈インテイク段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、音声の意味を推測し、理解した英語を使う活動を繰り返すことは、音声と意味のつながりを深めることに有効であったと考える。

3 自分の言葉として発話することをねらいとする〈アウトプット段階〉の「発話アプローチ」を取り入れた活動を繰り返し行うことの有効性について

(1) 結果

第4時は、「理解した英語の興味をもつこと」をねらいとした「発話アプローチ」の音声項目を取り入れ、絵本の読み聞かせを聞いて、ALTの「クイズに答える」という活動に取り組んだ。多くの児童が、聞いた英語から答えを推測し意欲的に答えていた。また、分からないときには、「Hint, please.」と言い、ALTとのやりとりを楽しんでいる姿も見られた。

次に、「分かる英語を繰り返し使い、英語に慣れ親しむこと」をねらいとした音声項目を取り



入れ、グループで話し合いながら、「絵本づくりを考える」活動を行った。この活動においては、新しいカードを提示したところ、言いたい思いが先行し、言い慣れた英語以外の英語も使って表したいという意欲をもった児童も数名見られた。抽出児童Aは、絵本を使って2年生にクイズを出すという目的に向かい、2年生に伝わるように慣れた英語を思い出しながら、「What do you see? はどう」「Animal worldにしよう」など、自分が分かる英語を選ぼうと意欲的に取り組む様子が見られた。



図12 クイズを出す児童

その後も、同じねらいを取り入れ、グループで選んだ英語を使い、「グループの中でクイズを出し合う」という活動を行った。抽出児童Bは、分かる英語を使ってクイズを出し合い、お互いにアドバイスをし合いながら、「First hint?」「I like carrot.」や「Nice」「Excellent」などの誉め言葉も合わせて使っていた。また、ジェスチャーを使いながらヒントを出す姿も見られた。



図13 ヒントを出す児童

第5時も、第4時と同様の音声項目を繰り返し取り入れ、自分たちで作った絵本を使って「2年生にクイズを出す」という活動を行った(図12)。児童が「What do you see?」と質問し「First hint, red.」「Second hint, circle.」などとジェスチャーを交えてヒントを出すと、2年生が日本語で答え、それに対して分かりやすい英語で誉めるなど慣れている英語を選んで伝えていた(図13)。抽出児童Aは、2年生のグループとのやりとりを繰り返している中で、2年生の日本語の答えに「That's right. Nice.」と誉めた後、「English, octopus.」(「英語では『たこ』と言うんだよ」と分かる英語で伝えたり、具体物で示しながらヒントを言ったりして英語の表現を選んで使っている様子が見られた。

資料3 抽出児童Aの感想

いろいろな表現ができるようになった。  
話すときに自然とある英語が言えるようになった。  
たかさんの英語が言えるようになった。

資料4 抽出児童Bの感想

大きな声で、はっきりと、2年生にわかりやすいように  
ジェスチャーもできて良かったと思いました。  
大きな声で、はっきりと、自信もって英語を言えた。

また、抽出児童Bは、2年生が答えに戸惑っていると「Special hint.」と言って英語で付け加えてヒントを出し、自分の分かる英語を選び、進んで使っている様子もうかがえた。振り返りカードを見ると、抽出児童Aは、自分たちで作った絵本を使い2年生にクイズを出す中で、2年生でも分かる英語を自分で選んで表現できるようになったことを記述していた(資料3)。抽出児童Bも、ジェスチャーも交え、2年生に分かりやすく英語で伝える中で自信をもって言えたことを記述していた(資料4)。

(2) 考察

〈アウトプット段階〉の「発話アプローチ」の音声項目を取り入れ、自分たちで作った絵本でクイズを出すというような目的や状況に応じて、英語を繰り返し使うことは、このように、意味のつながりが深まった英語を自分で選んで使うこととなり、自分の言葉として発話するようになったものとする。ただし、「分かる英語を繰り返し使い、英語に慣れ親しむこと」をねらいとした音声項目を取り入れた「絵本づくりを考える」活動においては、自分の言いたい思いが先行して、慣れない英語を発話する様子が見られたので、活動に取り入れるときには、カードの種類を精選し、活動で用いた英語をより多く提示する方が、言い慣れた英語を使うようになり、児童にとって無理のない発話が促されると考える。

〈アウトプット段階〉後にアンケートを行ったところ、この活動をしてよかった点として96%の児童が「いろいろな表現で言えた」を挙げ、92%の児童が、「自然に英語で言えた」、86%の児童が

「自信をもって言えた」を挙げ、どれも高い値となった(図14)。このことから、これらの音声項目を取り入れた活動の中で、英語を繰り返し使うことによって、児童は、自分の言葉となった様々な英語から状況に合った表現を選んで自然に発話していることが分かる。そして、自分の使った英語が、相手に伝わることを体験したことから、音声に慣れ親しみ、自信をもって使っていくようになったと考える。

また、「楽しみながら英語を使おうとしましたか」という質問に対して、第5時では、「した」「まあまあ」も合わせると、100%の児童が、楽しみながら英語を使おうとしていたと答えた。このことから、楽しみながら英語を使おうとする意欲が、授業を重ねるごとに高まっていることが、振り返りカードの比較から分かった(図15)。

以上のことから、〈アウトプット段階〉の「発話アプローチ」を取り入れて、目的や状況に応じて使う活動を繰り返すことは、音声と意味のつながりを深めた英語を自分で選んで使うようになり、音声に慣れ親しみ、意欲的に表現することに有効であったと考える。

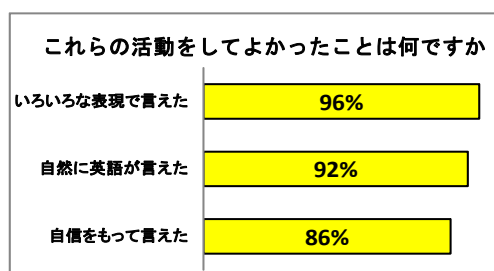


図14 〈アウトプット段階〉後のアンケート

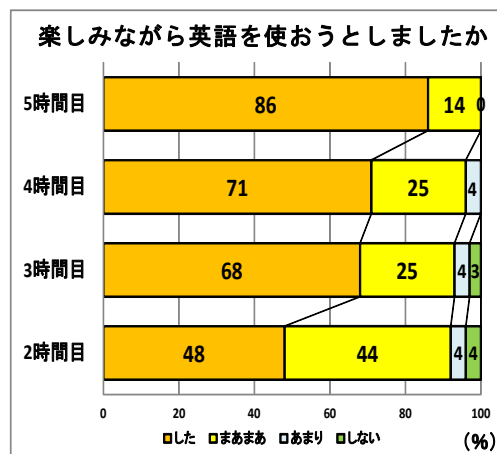


図15 振り返りカードの結果

## Ⅶ 研究のまとめ

### 1 成果

- 〈インプット段階〉〈インテイク段階〉〈アウトプット段階〉と段階ごとの「発話アプローチ」の音声項目を活動に取り入れながら授業を進めたことで、児童は、英語の音声と意味をつなぎ合わせ、そのつながりを深めるようになり、徐々に音声に慣れ親しむようになった。その結果、英語を発話することへの自信が高まり、意欲的に表現しようとするにつなげた。
- それぞれの段階の「発話アプローチ」の音声項目を活動に取り入れるときに、「発話アプローチ」のねらいに着目し、そのねらいに沿った音声項目を取り入れた活動を繰り返した授業づくりをしたことで、児童は、活動の中で意欲的に表現しようとするようになった。

### 2 課題

- 複雑な活動に、段階ごとの「発話アプローチ」の音声項目を適切に取り入れても、児童は音声に慣れ親しむことが難しいので、児童の実態に合わせ、分かりやすい活動に取り入れることが大切である。
- 単調な活動の繰り返しだけでは、活動に対して児童の集中力が持続できないので、「発話アプローチ」のねらいをしっかり把握しながら、指導者と児童、児童同士のかかわり合いも取り入れながら活動を繰り返していくことが必要である。

### <参考文献>

- ・村野井 仁 著 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導』 大修館書店 (2006)
- ・直山 木綿子 編著 『小学校外国語活動モデル事例集』 教育開発研究所 (2011)
- ・高島 英幸、東野 裕子 編著 『プロジェクト型外国語活動の展開』 高陵社書店 (2011)  
(担当指導主事 小川 加寿美)